

不登校、結集する親たち



一、「アーベルの会」の誕生とねらい

「アーベルの会」の正式名称は、「新潟県子ども発達と不登校を考える会」といい、一九九三年三月に産まりました。それは、「不登校問題を通して子ども発達を考え、学び、行動していく、親と教師・専門家による会」です。目的は、「不登校問題を通して、現在の社会や学校・家庭の問題点を明らかにし、その見直しを進めていくと同時に、子どもが行きたくなるような学校・子どもが生き生きと活動できる学校はどうかあるべきなのか、そのために親や教師は何をなすべきかを考え、行動していくこと」です。「アーベル」

というのは、横湯園子さんの著書『アーベル指輪のおまじない——登校拒否児とともに生きて』から取りました。ドイツ語で「しかし」とか「にもかかわらず」「ふたたび」の意味があります。

二、会の活動と成果

ほぼ月一回開いている会では、不登校生徒と関わった教師のレポートの学習や、子どもが不登校になった経験をお持ちの親の体験を聞いたり、近況報告やそれへの質疑・親の立場からの学校への質問・願い・意見、教師の立場からの学校の近況報告や親への質問・意見の交流を中心に行っています。そして現在、新潟市と

新津市で「子どもの居場所」(フリースペース)を各週一回開いています。

会員は今、二四〇名です。

九六年八月の「アーベル」例会は、新津市、巻町、新潟市の三箇所で開催。この他に私達がつかんでいない例会や不登校の子ども等を主にした集まりや活動はあちこちで行なわれています。

また六月は新発田に、不登校を考える親と教師の会が発足して月例会を続けています。

三、会の意義

「会」は次のような場であるといえます。それぞれについて事例を挙げたいのですが紙幅の都合でひとつだけにして、他は割愛します。(詳細は、西伸之「不登校の克服とはなにか」『にいがたの教育情報』三十六号、一九九四・一)

○不登校で悩む親が元気になれる場

○親の思いに教師も共感でき、やさしく元気になれる場

○親も教師も自分を見なおし、自分が縛られていたものに気づかされる場

○学校のおかしさを感じる場

○親と教師が手を取り合える場

○不登校は絶望どころか、子どもの発達にとって重要な時期だということを確認できる場

○不登校問題に関するさまざまな情報が得られる場

不登校の子どもを持つ多くの親が、「他の子はみんな学校へ行っているのに、なぜ我が子だけが」と一人で悩み苦しんでいます。何とか子どもを学校に行かせようとあせったり、自分の子育てが悪かったのかと落ち込んでいます。そのことがますます子どもを追いつめてしまっています。そんな同じように苦しみ悩んでいる親同士が、悩みを語りあい、すでに不登校の悩みをのりこえた親の体験や実際に不登校状態の子ども自身の話を聞くことで、すごく気持ちになるようです。

四、会の課題

約四年半の活動で、課題が明らかになってきました。(1) 系統的な学習を進めていくこと

いろいろな経験を聞き、また自ら本や講演等で学びながら、不登校問題についての認識を深め、ゆとりを持って子どもに接することが出来るようになってきました。さらに系統的な学習の時間を確保し進めていく

ことです。

(2) 子どもが行きたくなるような学校づくり

会の目的でもある「子どもが生き生きと活動でききたくなる学校づくり」はかなりはつきりしてききました。しかし実践がまだ不足です。「どうしたらそんな学校・学級にしていけるか」の実践が。

(3) 行政への働きかけ

「子どもが行きたくなる学校」にしていこうと、多くの問題を含んだ学習指導要領の見直しや職場の多忙化の改善等は、教育委員会等の行政機関の努力が不可欠です。不登校加配や不登校問題の研修会の開催等、一定の努力は感じますが、教員を増やすとか、学級の定員を減らすとか、部活動の社会体育への移行など、教員がゆとりを持って子どもたちに接することができず、状況を作りだすことにもっと力を入れてほしいと思います。

水原・笹神「スコーレ虹」(不登校の子どもたちの居場所です)は、村当局に要求して、光熱費や施設使用の費用を援助してもらい、「スコーレ虹」へ行く日を学校の出席日数に加えると約束させました。

このような行政への働きかけも大切になっています。

(4) 県内各地に「アーベルの会」のようなサークルを広げていく

七月中旬に、県内の自主的な不登校の会関係者十七人(九団体)が初めて集まり、経験を交流しました。それは、教育科学研究会の全国集会(会場、湯沢町)に報告するために、きっかけでしたが、予期以上の成功を収めました。これからは連絡を密にしながら交流を深め、広げていくことが出来ます。

(5) 教員の参加を増やす

不登校の広がりへの割りには教員の参加が足りません。学校を変えていけるのは、何といっても当面は教員です。これからも教員に働き掛けていきます。

(6) 専門家やこの問題に関心を持っている多くの人の参加を

医師や大学の先生・カウンセラーなど、専門の知識を持っている方々やいろんな分野で活躍している方々の参加によって、より一層勉強になり、展望が開けてきます。積極的にそういう方へ呼びかけていきます。

五、不登校の克服とは

「不登校の克服」と言う際大事なことは、「学校に行かない(行けない)」ことの子どもにとっての意味」

を考えることだと思えます。不登校の期間を通じてすばらしく成長し、自分の力をつけていった子どもたちが大勢います。「不登校＝悪」ではないのです。ところが大人は「不登校はよくないことだ。早く学校へ行かせよう」と焦ります。それがますます子どもに罪悪感を持たせ、希望を失わせてしまっていることがよくあるのです。

そうではなく「豊かにこもれば豊かに脱皮する」(横湯園子)と期待して子どもの自己回復力を信じて、待つことが出来るか否かが、大切なのではないでしょう。

その結果、自分の人生をより豊かに生きる力が子どもの中に育っていった時こそ、「不登校の克服」が出来たといえるのでは、と考えます。

また、「不登校という出来事を通じて、親や教師が学校や社会の問題点に目を向け、成長し、ゆとりを持って子どもに接することが出来るようになる」。そんなことが親や教師にとって、「不登校の克服」なのかもしれません。

六、おわりに——私たちの立場

現在の学校に多くの問題があることは、これまで指

摘してきた通りですが、私たちは学校否定の立場には立っていません。子どもの学ぶ権利を保障し、生きる力をつけるうえで公教育は大変重要です。問題は公教育の質の問題です。子どもも多く親も学校そのものを否定しているのではなく、存在さえ脅かされるような学校を否定しているのではないのでしょうか。すべての元凶を学校と教師に求め、それを否定する風潮に対しては、今後も批判していかなければならないと思います。また「学校に行かないこと」「みんなと同じことができないこと」を「子どもの個性だ」として、「学校に行かせよう」「できるようにさせよう」という努力を否定するのも誤りだと思います。「個性」と言うことによって子どもの能力を固定的にとらえ、結果として子どもの可能性を摘み取ってしまうことになりかねません。私たちは、「人間は異質同等である」ことを認めあいながら、「子どもは無限の可能性を持っている」という立場に立って、これからも運動を進めていきたいと考えています。

(西 伸之)